

報告1. 東洋の学問から、西洋の学問へ

山本 珠美（香川大学生涯学習教育研究センター）

それでは、早速、「報告1. 東洋の学問から西洋の学問へ」を、お話をさせていただきます。資料はこちらのほうの3枚目、1枚めくっていただいて、表紙の裏側も私のレジュメになっているんですが、前に出ているスライドと同じものが3枚目から出ておりますので、そちらのほうを見ながらお聞き下さい。全く同じものなので、前に書いてあることはメモしなくても大丈夫です。

私からは三つお話をさせていただこうと思います。この建物ができたのが、1867年、今からちょうど150年前です。明治維新がいつ起きたかという1868年なので、明治維新が起こる直前、本当にこれから戊辰戦争勃発しますよ、の直前のときに建てられたという建物です。ご存知のとおり、明治維新を境に日本の社会は大きく変わります。政治体制が変わったことが一番大きなところではあるかと思いますが、このお宅、あちらのほうに弘濱書院という私塾も復元されておまして、まだご覧になっていない方は、あとでご覧いただければと思いますが、ここの林家というのは学者の家系だった。その学問の体制というものも、明治維新を境に大きく変わります。

どういうふうに大きく変わっていったのか、これから三人の人物に焦点を当ててお話をさせていただきますが、一人は佐藤一斎です。江戸時代の最高学府、「佐藤一斎と昌平坂学問所」と書いてあります。佐藤一斎という方、名前聞いたことある方はどのぐらいいらっしゃいますか。ポツリポツリですね。ありがとうございます。この方ですね、実はこの建物に書が残っているんです。残念ながら手を挙げる方は少なかったんですが、江戸時代末期の大変有名な教育者です。

この方、かなり長く生きた方だったので、お弟子さんもたくさんおりました。今だったら誰が有名な学者として、皆さん思い浮かびますでしょうか。京都大学の山中先生とか、そのあたりが有名ですよ。それぐらいと言ってもいいと思うんですが、とっても有名な先生だったということで、ぜひこの建物ともゆかりがある方ですので、お名前覚えて帰っていただければと思います。

それから2番目、東京大学誕生。日本の国立大学として最高学府が明治になって新しくつくられるわけですが、星新一という作家さんいらっしゃいますよね。ショートショートで有名で、お読みになった方も結構いらっしゃるんじゃないかと思うんですけれども、星新一のおじいちゃん、小金井良精という方に焦点を当ててお話をしていこうと思います。

それから3番目。もう一つの大学ということで、今はもうない、ないというか東大に吸収合併されてしまったというだけなんで、今でも残っているんですが、東京大学が明治10年に建てられたのと同じ年、明治10年にもう一つ別の大学ができるんですね。工部大学校と言います。日本がパナソニックだとか、ソニーだとか、トヨタだとか、製造業で非常に世界をリードする立場になれたのは、実は東大じゃなくて、このもう一つつくられた工部大学校が大きかったと言われたりもしますが、そのお話です。その話をするときに欠かせないのが伊藤博文です。伊藤博文は皆さんご存知だと思いますけれども、彼ら三人の人物に焦点を当ててお話をしていこうと思います。

では、佐藤一斎、この方です。この絵、重要文化財として指定されておまして、本物がどこにあるかと言いますと、上野の東京国立博物館にあります。この画像はどこから取ってきたかという、東京国立博物館のホームページです。ホームページを見ればいつでも見ることができますね。渡辺崋山が描かれた絵ということで、これ、上のほう、ちょっとカットしちゃったんですが、上のほうには書が書いてあります。書があって、その下にこの肖像画があるのですが、この方が江戸末期大変有名な教育者でした。

1772年生まれで、1859年に亡くなっております。長生きですね。90近くまで生きていらっしやった。昌平坂学問所で教えた儒学者とあります。昌平坂学問所というのは、江戸時代の最高学府と言っていいかと思えます。今、東京にお茶の水という駅があるんですが、東京医科歯科大学のキャンパスがあるところ、あのあたりにあったと言われております。

『言志四録』という本がありまして、この本は西郷隆盛の座右の書と言いますか、愛読書と言われている本の一つなんですけれども、この言葉、大変有名な言葉でして、漢文で書いてありますがちょっと読んでいきますと、「少くして学べば、即ち壯にして為すことあり」。つまり若い頃、子どもの頃に学問とか勉強すれば、大人になってから何か為すことができる。「壯にして学べば、即ち老いて衰えず」。中年になって学べば、学習を続けていけば、年を老いてからも衰えない。さらに、最後すごいですね。「老いて学べば、即ち死して朽ちず」、名が残ると。要は人間一生勉強しましょうということなんですけど、この言葉、各地あちこちに実は碑が残っておりまして、この近くで言いますと、香川県内は知らないんですけれども、岡山県に行きますと、岡山県生涯学習センターという建物がありまして、そこに行くとその文字がどーんと飾られています。まさに生涯学習だぞというようなことを言ったものなんですけれども、この言葉が有名な言葉として残っております。

佐藤一斎は地方地方の学者たちとの交流もあったということで、だからこそこにもその書が残っているということになるわけです。

さてちょっと細かい字で申し訳ないです、見にくいかもしれないんですが、皆さまのお手元にもありますので、そちらのお手元で見ていただいたほうがいいかもしれません。昌平坂学問所ってというのがここにありまして、これ図は明治維新を境にして、左が江戸時代の学問所、それから右が明治の学問所ということなんですけど、昌平坂学問所はとにかく当時の最高学府なんですけど、何を学んでいたかという儒学なんです。儒学というのは、要は中国から来た学問ということになるわけなんですけど、それを学ぶ学校だった。それとは別に天文方とか種痘所ってというのがあって、これ実は名前がコロコロ変わっていったんですけど、詳しいことは書いてないんですけれど、天文方は、要は洋学。鎖国をしていましたが、長崎だけは開いてましたから、オランダからいろいろな本が入ってきてたんですね。オランダ経由で来たヨーロッパの学問というものを、研究していたわけです。一方で種痘所ってというのは、これは医学です。日本の医学というのはもともとは西洋医学ではなかったわけなんです。医学も、そもそも東洋から来たというか、中国から来てたんですが、西洋の医学を学ぶところとしてこういったものもできていたと。

明治維新が起きて、これらの学問所はなくなったわけではなくて、そのまま明治政府が引き継ぎます。引き継いで東大にするんですが、東大にするときに、この昌平坂学問所の系列というのは、実は閉鎖されます、廃止されてしまいます。ここは、要は真ん中のこのラインというのは東洋の学問を教えたところなんですけど、東洋の学問は廃止されてしまいます。

なんでかという、東洋の学問にも実は大きく二つの系列があるんですけれども、儒学ですね、中国から来た学問を推しているグループと、日本固有の学問で国学というふうには言っていたんですが、主導権争いをしてしまうんですね。内部抗争をしてしまって、その内部抗争が「もうお前らいいかげんにしろ」ということで、閉鎖され、廃止されてしまったと。一方洋学の系列です。天文方の系列と、種痘所の系列。天文方は大学南校に、種痘所は大学東校にと変わります。

南校だとか東校って、東の学校に南の学校ってあえて書くっていうことは、これは分校なんですよ、極端な言い方すれば。中央にあるのは、あくまでもこの昌平坂学問所の系列。東も西も、北も南も何も書いてない、ここが中心なんだけど、ここが漢学派と国学派で、喧嘩を始めてしまった。私と山本裕先生が日

本で生まれ育ったんですけれども、張先生は中国から来られた、お生まれになってる方ですが、ここでんかを始めてしまったということですよ。それでつぶされてしまって、残ったのが洋学。

南校は実はイギリス、アメリカ系、英語なんですね。英語を中心に勉強していた学校。医学はドイツが中心だったので、ドイツ語を中心に学んでいた。ここも実は結構危険だったんです。お互い疑心暗鬼があったんだけど、ひどいことにはならず、この上下がくっついて東京大学ができたということですから、もともと東大ができたときは、アメリカやイギリスやドイツや、そういったヨーロッパの学問を学ぶ学校として建てられたんだということです。この系列、なくなってしまった東洋の学問に対し、西洋の学問が残った、と。残って東大ができたということになります。ちょっとそれだけ覚えていただきたい。

次に星新一のおじいちゃんのお金井良精。もともと江戸期の生まれですので、藩校に入るんです。長岡藩なんですけれども、長岡藩の藩校に入るんですが、長岡ってところは朝敵なので、新政府軍にコテンパンにやられてしまうんですね。で、逃げていくわけですよ。仙台のほうに逃げていく。若い頃は結構苦労をされるんですが、藩校で学ぶどころじゃなくなっちゃった。

明治維新になって、それでも優秀な方だったんでしょう、最初大学南校に入る。英語を勉強するということが大学南校に入るんですが、理由はよく分からないんだけど、退学させられちゃうんですね。この理由は分かってないということなんです、その後大学東校という医学のほうに入り直して、それで後には東大医学部の学部長にまで上り詰めたというような方なわけですよ。お顔がこれですよ、この方。星新一のおじいちゃん。母方なんです、母方のおじいちゃんも東大医学部の学部長まで務めた方、長く医学部の先生をされた方です。こういうような経歴になっております。安政5年生まれですので江戸末期だったんですが、結構長く生きていらっしゃるんですよ。医者の不養生という言葉もありますが、小金井良精はかなり長生きをされてる。

『小金井良精日記』というものがあって、この方はものすごい詳細な日記を残しています。それが一昨年から昨年にかけて出版されたということで、当時の大学の先生の生活というものがこれを読むとよく分かる。おもしろいのは、よく下痢になってます。ごめんなさい、汚い話で。そういうようなことまで書いてるんですね。あとはボートが好きだったんですね。よくボートに乗っていて、昔東大ができたばかりの頃、春にボートの大会をするっていうのが、東京の町の風物詩になっていたというのがあります。それは学生だけじゃなくて、教員も出てたんですね、教員の部というのがある。ボート大会の前になると、毎日ボートに乗っている。一体いつ仕事してたんだろう、みたいな。別に休みの日だけじゃなくて、月火水木金と、やたらボートの練習、ボートの練習というふうにして書いてあって。星新一のおじいちゃんってだけではなくて、当時の明治の頃の学者、知識人がどういう生活をしてたのかというのが、この日記を読むと分かる。ただ、日記を読むのはなかなか大変です。結構分厚いものが4冊ありますので大変なんです、星新一のこの本『祖父・小金井良精の記』ですね、これは1冊の本としてまとまっておりますので、もし興味のある方はお読みになっていただければと思います。

そして最後にもう一人、伊藤博文。今日のメンバーを見ますと、千円札が伊藤博文だった時代をご存じの方々ばかりですよ。20歳ぐらいの学生だと、伊藤博文が実は千円札だったということを知らないんですが、この顔はおそらくほぼ毎日のように眺めていた顔ではないかと思えます。伊藤博文という方は皆さんよくご存知なわけで、あまり説明する必要はないと思うんですが、何と云っても日本の内閣総理大臣を4回も務めた方です。もともとは、萩の下級藩士だった方。吉田松陰に師事していて、松下村塾に若い頃学んでいた。尊王攘夷運動に身を投じたというようなことが言われるわけで、その後明治になって政治家になって、総理大臣にまでなったという人です。

吉田松陰は、よくNHKの大河ドラマとかにも出てくるのでご存知だと思うんですけども、密航しようとしたことがあったんですね。密航しようと思ったんですけども、捕まっちゃった。それで捕まって、獄に入れられて死んでしまったということですが、先生ができなかったことを、伊藤博文はやっているんです。

皆さんご存知かどうか、あまり語られてないことのような気がするんですが、伊藤博文は密航したんです。成功したんです。どこに行ったかという、ロンドンに行ったんです。ロンドンに行って、そこで工業力というものをまざまざと見せつけられるわけですね。当時のイギリス、大英帝国です、ものすごい繁栄してます。鉄道が走ってます。「うわー、なんだこれは」みたいな。見たことないですよ。そのときに、とにかく人材育成が必要だということを強く感じた。一緒に密航したのが全部で5人です。伊藤博文も行きましたが、伊藤博文だけではなくて、残りこういった方々。全員長州の下級藩士たちです。この人たち「長州ファイブ」と言われているんですが、ロンドンに留学に行きました。

この話、映画になってるんですけど、ご覧になった方いらっしゃいますか。『長州ファイブ』っていう映画。いらっしゃいますね。これ、私授業でよく学生に紹介している映画なんです、TSUTAYAなどで100円で借りられますので。インターネットをおうちでやられる方であれば、時々無料で1ヶ月間ぐらい見られるときがありますので、ぜひご覧になって下さい。見ていただくと、伊藤博文を始め、若い長州藩士たちの成功した密航留学が分かりますので。

それで、この長州ファイブのうち、右側の二人ですね。伊藤博文は政治家ですが、手前側に山尾庸三という人がいます。この人はあまりご存知ない方がいらっしゃるかもしれませんが、この二人がスコットランドから人を呼んで学校を作ります。ロンドンじゃなくてスコットランドなのは、山尾庸三はロンドンに留学した後、スコットランドのグラスゴーに行きますので、そこから人を呼んでつくった学校が工部大学校と言われる学校で、これが今の東京大学工学部の前身。この学校が要はスコットランドの学校体系を導入した。スコットランドって当時産業革命の中心地でもあったわけです。今は衰えかけているというか、大分前から大英帝国斜陽ですけども、当時はスコットランドが工業の中心ということだったので、グラスゴー大学の先生を呼んで、東京大学工学部をつくったと。

まとめますが、この図ですね。もともと江戸時代はこの昌平坂学問所の流れ、「東洋の学問」が日本では中心だった。ところが、この系列がなくなってしまって、英米系、それからドイツ系の洋学・医学が中心になって、工学部のない東京大学ができた。同じ年にスコットランドから人を呼んで、工部大学校という工学の大学をつくった。最終的にこれらが一緒になって帝国大学になるんですけども、いずれにしてもここは完全に西洋の学問を学ぶ学校としてつくられていったということです。これで大体20分ですが、東洋の学問から西洋の学問へという流れ、ご理解いただけたのではないかと思います。

では、こういった大きな流れがそんなに簡単に日本人に受け入れられたのかどうかというと、受け入れられた部分があれば、あまりに変化が急過ぎて追いついていかなかった人たちもいたわけです。そのあたりのことを次の山本裕先生にお願いをしたいと思います。